

いざはじめてみるとかなり大変だということがわかった。XPでやろうにも、これまでのやり方で進めるように見せながらではとてもうまく立ち回れないのだ。ただ、それを除けば、ほぼ想定どおりではあった。

まず小高と鮫島のやり取りから始まった。

「三沢のチームはUPとかいうのでやると言ってるやがった。で、おまえたちの中にこれよりもいいやり方を知っているやつはいるか？」

小高が答える。

「べつに今までのやり方でいいんじゃないの？最近ではアジャイル開発とかいわれる・・・なんだっけ？なんとかピーとかラグビーみたいなやつとかあるらしいけど。」

城之内が口をはさむ。

「XPとSCRUMですよ。なんか、子供だましのようなやり方をするやつです。」

「そう、それ。で？それってどうなのよ。」

「なんか、わかっているところから少しずつ作るとかいうやつで、あれはソフト開発を完全になめきってますね。ソフト開発は設計時からシステムチックに考えるべきなんだ。

僕なら絶対に使いませんねっ。」

城之内に力が入る。そして、鮫島のほうを向いて自身たっぷりにいい放つ。

「鮫島係長、うちもUPでやりましょう！あれなら実績もあるし、イテレーションごとの目標も明確です！あれはかなりいいけてますよっ。」

「う・・・うぬう。」

鮫島としては複雑な気分だ。

「(三沢と同じものを使うなんて俺のプライドが・・・ん？まてよ？これで向こうが失敗して俺だけが成功したら・・・)」

そんなことを考えていると、小高が口を出してきた。

「そんなわけのわからない流行りものより、これまでのやり方でいいじゃない。だいたい、実績が少ないんでしょ？」(「つんつ」とした感じで話す)

城之内が応戦する。

「そんな成功するかどうかもわからない目標しか立てられないものよりも、確実にできる範囲でイテレーションを区切る方法で、かつ統一的なアプローチで作り上げるほうがいいに決まってるじゃないですか。そもそもマイルストーンごとに中間成果物しかできないのがいけないですよっ。」

あいかわらずの弁舌ぶりだが、小高もこれに負けていない。

「あら。なら見積りはどうなさるおつもり？私たちはサブシステムなのに、他と連携せずにおすすめがいいの？だいたい、実績、実績、とおっしゃるけど、それはコンサルタントがいたからうまくいったんじゃないくて？どうやって品質管理をおこなうというの？答えてみなさいよっ。」(「ふんっ」といった口調で話す)

「それはこれからやっていく過程で作っていくんでしょ！そんなこといつてるからいつ

までたつても古いやり方のままなんですよっ！」

すこし声を荒げて城之内が反発する。三沢の読みどおり、相手を論破する方向へ走ってしまったようだ。幸い二人は別チームだが、それをまとめる鯨島にとって問題であることに変わりはない。意識がバラバラでは全体としてうまくいかないのだ。

場所が変わり、会議室での打ち合わせ風景。※レイアウト1でお願いします

「・・・と、いうわけで、ここまでについて意見や質問はあるか？」

三沢がチームメンバに開発の仕方を説明していた。以前にすこしだけやったXPでのやり方を説明していたのだ。書籍だけの請け売りとはいえ、意外に成果があったのも事実。そこに三沢は勝算を見出したのだ。しかし、三沢は勝算を勘違いしていた。期待や僥倖などは勝算の範疇ではない。さらに、ひとつが読みどおりに進んだことで兵法書を読み直すことをしていなかった。

「(なにも意見が出てこないな・・・。まあ、これは実践してゆく過程で出てくるだろうし、あまり気にしないでおくか。)」

三沢は、『孫子』の【コレヲ死地ニ陥レテ然ル後ニ生ク】という言葉进行を思い出していた。

「人間、必至になれば結構やれるものだからな！」

三沢にも長年の経験が染みついていたのだ。まさかこれが後の憂いになるとは・・・。

〜一週間後〜

まだ始業して間もないというのに、城之内がすこし勢いづいた口調で話し掛けてきた。

「三沢係長。係長のところはUPでやるんですよね？係長からもひとこといつてくださいよ。うちのほうではいままでとおなじやり方にするとかいつてるんですよっ。」

この言葉を聞いて三沢はすこし驚いた。

「(もう一週間も経ったというのに、まだ言い争いをしているのか？！)」

しかし、それはそれ、かねてより考えていた戦術どおり吹き込むことにした。

「そうだなあ・・・たしかにUPは無事にプロジェクトを成功させた。これは紛れもない事実だ。実績の多さよりも、実現したメンバーの意見に耳を傾けるべきだとは思うな。けどな、城之内。きみは今、おれの配下じゃないんだ。そこまで介入するわけにはいかないんだよ。」

「しかし、その事実すら認めようとしませんよ、あそこは！」

城之内は熱くなっているようだが、実際、あまり介入するわけにはいかないのだ。

「(頭をかきながら) そうはいってもなあ・・・。ただ、PLの大俵課長はそのUPを投入した張本人だろ？そういったところも強調すればどうだ？やってみようっ。」

ポンツと城之内の肩をたたき、軽く済ませておく。

「あの生きた化石たちがそう簡単に納得するかなあ・・・。」

ボソボソとグチをこぼしながら城之内は去っていった。

くその翌日く

今度はリフレッシュルームで小高と出会った。

「あら係長、お久しぶり。」

(ん？と、振り向く)

「ああ、小高か、そういえば久しぶりだな。うくん、同じ会社、同じフロアだというのに、まったくコミュニケーションがないのも変な話だよな。」

たしかに島は離れているが、それにしても会話がなさ過ぎるのも否めない。ほとんどのものが日々忙殺されており、フロアでは会話という会話がなされていないのだ。

「そういえば、そっちもUPでやるのかい？」

三沢の質問に小高がふんとした口調で答える。

「まさか、そんなわけないでしょ！誰がそんなことをいつてたの？！」

「え？あ、いや、そうなのかなあ〜と思っただけで・・・。」

小高の高飛車な態度は、思わず恐縮してしまうほどだった。

「ふーん。ま、いいけど。私はあんなものは認めないわよ！リスクの高いことをやって失敗したら、誰が責任取るっていうの？！」

ある意味、小高の言い分は正しい。だが、城之内の言うところにも分はある。

「なるほどな、たしかに。おれだって安全確実なほうを選ぶよ、うん。」

これまた用意しておいた問答を交わしておく。

「(?! ) あら、わかってるじゃない。上役というのはゴマスリに専念ばかりしているものだと思っていたら、そうでもない人もいるようね。」

(「ふーん」といった感じで三沢を見て、すぐに向きを変える)

「それじゃ、失礼するわ。」

カツカツと小高は去っていった。

「・・・ふー、結構疲れるなあ・・・。」

すこしネクタイを緩めながらため息をつく三沢。すこし気疲れがうかがえる。

「(・・・内憂外患、か・・・。)」

三沢はすこし会社の悲運を憂いた・・・。